宮城・福島両県における慣行田植法の 地域性とその成立要因に関する研究

— 慣行田植法に関する諸行事について* —

佐藤徳雄^{**}・酒井 博^{**}・渡辺 正^{***}・東海林仲之助^{****}

Studies on the Rites and Ceremonies of the Traditional
Transplanting Methods of Rice in Miyagi and Fukushima
Prefectures.

Tokuo SATO⁺, Hiroshi SAKAI⁺, Tadashi WATANABE
and Chunosuke SHOJI

1. はじめに

さきに、全国大学農学部附属農場の共同研究（代表者神戸大学丹下宗俊・上山 泰両教授）の一環として、宮城・福島両県における慣行田植法の分布割合とその成立要因の概要について報告した⁸⁾。

今回の報告は慣行田植法に関連する諸行事について調査した結果の概要であり、研究費は主として文部省科学研究費（課題番号036022）によった。

2. 調査方法

昭和30年当時の慣行田植法に関連する諸行事を、1976年～1977年にかけて、現地において聞き取り調査を行なう一方、文献資料についても調査を行なった。

3. 調査結果および考察

慣行田植法に関連する諸行事として豊穡祈願、防病虫害祈願、田植期間中の祝い行事などがあげられる。これらの行事内容について検討してみると、つぎのようである。

1) 豊穡祈願

(1) 各戸での豊穡祈願

① 正月における豊穡祈願

わが国は農をもって立つ国として正月から各戸で豊穡祈願を行なっていたようである。大晦日には神棚に御歳徳神様（正月に迎える神で、米の神様、田の神様とも、また、先祖神ともいわれている）を祀り、栗や柳、みずのきなどの枝にいなほやあわんぼ（餅花又は稲の花）をつけて飾り、正月には御神酒や餅などを供えて、今年も豊作であるように祈願するのが一般的である。

宮城県南（白石市など）では正月に釜神様にお田の神様のお礼（第1図）を祀り（宮城県北では初田植の時神棚に祀る）、それに御神酒や餅を供えたり蔵の中の種籾俵に芯松を立て、それに鏡餅や餅花を供えたりして豊穡を祈願している。

福島県会津地方ではサツキといって正月14日の夕方に雪の中に藁や豆殻をさし立てて田植えの真似事が行なわれており、宮城県宮城郡でも同じような行事が行なわれているが、これらの行事も、その年の豊穡を祈願して行なわれたものだといわれている。

宮城県北にある奥州涌谷の笹岳様（笹峯寺白山権現社）は「五穀豊穡の守り神」として有名であり、旧正月25日の祭典に県内はもとより県外からも参拝者が訪れ、豊穡祈願が行なわれており、それが今日まで続いている。そこでは作試し（巫子が的の弓矢を射り、的中すれば豊作、外れれば何分作といっ

* 昭和52年5月26日受理、第12回講演会で発表

** 東北大学農学部附属農場 宮城県玉造郡鳴子町、989-67

*** 福島県農業試験場

**** 宮城県農政部農業普及課

+ Kawatabi Faculty of Agr., Narugo-cho, Miyagi-ken, 989-67

第1図 お田の神様のお札

第2図 稲虫よけのお札

てその年の豊凶を占う儀式)や種ものの交換(土地がかわれれば作柄がよいということで、交換したい種もの1合(1.8dl)位を住所、氏名を書いた紙袋(和紙)に入れて奉納し、先拝者が奉納した種ものと交換したり、先拝者が奉納した種ものを借りてゆき、翌年2倍(2袋)にして奉納するもので実質的には種子交換の役割りを果たす)などが行なわれている。

② 種まき時における豊穡祈願

ツツジや山桜、ウツギなどの花が咲く頃になると苗代に種子をまき、その水口にお田の神様を祀り、苗がすくすく伸びることと今年も豊作であることを祈願する行事が両県で広く行なわれている。水口祭り、苗代祭りなどといわれるもので、お田の神様の祀り方は地方によって異なるが、その代表的なものを記してみると、つぎのようである。

宮城県では苗代の水口にお弊束を立て、まき残った種もみを焼き米にして和紙に包んで供えるが、県北では船形山神社のボンデンや笹岳山麓寺のカラス子札を竹にはさんで立て、焼き米を供えるところも広くみられる。

福島県では苗代の水口に三階松を四角に立て、しめ縄を張り、焼き米を供えるが、浜通り南(いわき市)のように苗代の水口にカラスヘイと称する半主聖印のお札や苗代祭りと書いたお札を竹にはさんで立て、種まき時期に咲く花(ツツジや山桜、ウツギヤマブキ、椿など)を飾り、焼き米を供えるところや、中通り南(石川郡など)のように苗代の水口に正月餅を供えた敷き紙(和紙)を三角に切ってウツ

ギの枝にはさんで立て、焼き米を供えるところもある。

③ 田植時における豊穡祈願

初田植には水田の水口にお田の神様を祀り、豊穡を祈願するところもみられる。

宮城県では水田の水口に稲虫よけのお札(第2図)を竹にはさんで立て、御神酒と赤飯を供える。そして、植えじまいの時には、その水口に植えた苗や植え終りの最後の苗(早苗振り苗という)3~7株を抜いて水洗いし、家

の神棚などに祀ってあるお田の神様に供え、それに御神酒と餅を捧げて豊穡を祈願する(その時、馬鋤を洗ってそれにも御神酒と餅を供えるので通称「まんが洗い」とっている)。

宮城県北の一部(桃生郡など)ではソオリ(サオリ)の訛ったもので田の神が山から降りてきて田植を司る)といって初田植の時に早苗3把(小束)をとり、その上に小さなおにぎりを1個ずつ3把にのせて家の神棚に祀ってあるお田の神様に供える。

福島県浜通り南など(いわき市・田村郡)では初田植の時、水田にニワトコや檜の枝を立ててお田の神様を祀り、その下から植え始めたといわれている。植えじまいの時は植え終りの最後の苗を抜いて水洗いし、家の神棚に供えるのは宮城県と同じだが、中通り南などでは早苗振り苗といって苗代の真中に小束2把分位の苗を残しておいて植えじまいの時、その苗をとって家の神棚に供える。

しかし、これらの方法は、昭和30年頃には簡略化されたり、省略化されたところが多く、宮城県北では、第3図に示すように、初田植の時苗代から1~3把の早苗をとって家の神棚に供えるところが多い。

白い苗(しま苗も含む)はお田の神様として珍重がられ、極力それを見つけて神棚に供えるところも多く、また、もち苗を供えるところも多い。

(2) 部落ぐるみでの豊穡祈願

部落民や部落の代表者(氏子総代など)が神社に集まり、神前に御神酒や頭尾付きの魚、野菜、海藻などを供え、豊穡を祈願する祭典(神宮祈年祭:2

第3図 早苗を神棚に供える時期

月17日、村祈禱：7月1日）などが行なわれたが、昭和30年頃にはほとんど姿を消している。

神宮祈年祭の祝詞の大意⁷⁾はつぎのようである。

「今年の農業を始めるのでこの部落（市町村など）から結構な御供物を捧げますから御神前に忌み清めまして御供え申上げる御飯は、しらけた米（白米のことを言う）に粃の米をさし上げ、御酒はたけの高い、そして腹のふくらんだ酒を入れるミカに溢れるほど一杯に満たしたのを並べ、野に生えるものはニンジン、カブナのような甘い野菜、ダイコン、ショウガのような辛い野菜、海に住むものは大きな魚、小さな魚、沖の方の海藻、岸近く of 海藻などに至るまで十分にお供え申して今日の吉い日の朝日が瞳々燦然としてさし昇る爽快な時に御神徳を讃頌して御祭申上げる事を御満足に御聞入れ御召上り下さいまして天下の人民が手の脇に田の水の泡を垂れ、両股に泥を掻き寄せて耕作する稲を始めとして野菜の葉に至るまで、農作物の総てを暴風や洪水の害に遭

わせないで、豊かに穫々としてよく稔る様に御加護下さいまして秋の新穀を献る新嘗祭（11月23日で終戦後勤労感謝の日に改められる）を厳かに立派に奉仕させて下さいませと謹みかしこまって御祭りの詞を申し上げます。」

2) 防病虫害祈願

田植えが終ると虫害が心配され、虫害を防ぐために各地で「虫送り」の行事が行なわれている。

古くからウンカなどの害虫駆除法として「祈禱」や「まじない」などがあったが、とくに「虫送り」は全国的な行事として有名である。

終戦後、BHCやパラチオンなどの普及により、ウンカや二化めい虫などの被害も少なくなったが、虫送りの風習は最近まで残っていたようである。

虫送りの方法も地方によって異なるが、その代表的なものについてみると、つぎのようである。

宮城県では田植後、ダンゴ、餅、赤飯などをットコ（苞）に入れたものを稲虫と称して竹枝の先に結んで村境の道端に立てて送るところ（仙北：加美郡）や、ダンゴ餅を竹串にさして水田の畦畔に立てて祈禱するところ（仙台市・名取郡）もあり、また、子供達が皿にダンゴを盛り虫送りと書いた旗を立てて川へ流すところ（宮城郡）や、笹に紙を結んで門口に立てるところ（亶理郡）もある¹⁰⁾。

福島県では田植後、5cm長さのット状のワラのダンゴを竹串にさして水田の畦畔に立てるところが多いが、浜通り南（いわき市）などでは稲につく害虫をとって紙袋や木の葉に包んで竹枝の先に結んで子供達が村境の川に流したといわれている^{3)、4)}。

虫送りのことを、福島県会津地方では「いなご送り」と呼んでいる。

3) 田植期間中の祝い行事

田植えは田の神の降臨を仰ぐ行事であるとして、初田植、中帳場、早苗振りなど、田植えの折り目毎

にお祝いをする行事が両県で広く行なわれている。

(1) 田植初日の祝い行事

初田植（宮城県では植えそめ、福島県では早稲田植やさつきなどともいう）といって家々では神棚にお田の神様を祀り、御神酒や赤飯を供えたり、本田の水口に御神酒や赤飯などを供えたりして無事田植えが終了することと豊穣を祈願する。

宮城県北では前述のように、初田植の時早苗 1～3 把を取って神前に供えるところが多く、これを「神釜どり」（本吉郡・気仙沼市）、「そうり」（桃生郡）などと呼んでいる。

初田植には隣近所や親類などに赤飯などを配って祝うのが通例である。

(2) 田植中間の祝い行事

中帳場^{なちやうば}といって田植えの中間に骨休みをかね簡単に酒盛りをし、一区切りをつけるものである。

(3) 田植終りの祝い行事

(イ) 馬鋤洗い：一般的にはまんが洗^{まんがせん}い（宮城県は植え上げ、福島県では大田植^{おほえ}、遅田植^{おそえ}ともいう）といって、家々の田植えが終了した日に馬鋤を洗い餅をついて祝う。神前（お田の神様）と馬鋤に御神酒と餅を供え、無事田植が終了したことを告げると共に豊穣を祈願する。宮城県南から福島県にかけては前述のように、早苗振り苗^なといって、田植終了日に早苗 1～3 把をとって神前（お田の神様や釜神様）に供えるところが多い。

まんが洗^{まんがせん}いには隣近所や親類などにさなぶり餅を配って祝うのが通例である。

(ロ) 早苗振り：一般的には部落または共同体の田植終了後、酒、魚、餅などを田植に参加した全員に振舞うなどして、お祝いと慰労をするものであるが、宮城県南から福島県浜通りにかけては、前述の馬鋤洗^{まんがせん}い^いに相当するものを早苗振り^なといっている。

(ハ) 大早苗振り：地域社会全体の田植えが終了したところを見計らい、赤飯などを炊き、地域社会全体が農休日にして祝ったり、慰労したりする。

4) 田植終了後の農閑日

田植終了後の農閑日を見計らい、1～3 日位を農休日にし、お嫁さんを実家にやって休養させたり、稼ぎ人を湯治にやって休養させたりする。この農閑日を骨休み、手やすめ、早苗振り日、お田の神様

（宮城県古川市）、神事（福島県）などといっている。更に、農閑日以後は、宮城県では三日押し、四日押し、四日詰め、福島県では一・六・五・十などと称し、4 日ないし 5 日おきごとに午後の半日を農休日にしていくところが多い。

宮城・福島両県の慣行田植法に関連する諸行事の概要は以上のものであるが、これらの行事については民俗学的な立場から、岩崎³⁾、竹内⁹⁾、その他²⁾、⁶⁾、¹⁰⁾の報告があり、また、全国的な行事については柳田¹¹⁾、伊藤⁵⁾、杜¹⁾などの報告がある。

つぎに、全国的な行事との関連について多少ふれてみたい。

正月に年神（正月に迎える神で、米の神、田の神とも、また、先祖神ともいわれる）を祀り、餅花などを飾り、豊穣を祈願する行事は全国的に行なわれているが、小正月に雪の中に豆殻などをさし立てて田植えの真似事（サッキ・庭田植など）をする行事は雪の多い東北地方でみられるものである。

種まき時に苗代の一部に自然木の枝や季節の花などを挿し、それに焼き米を供えて祀る行事や、田植時に水田の一部や家の神棚などに餅や赤飯などを供え、早苗を添えるほか、水田に自然木を立てて祀る行事は、全国に広く分布しており、また、苗代や本田に正月に用いた年神の弊などをを用いる事例も、かなり広い地域にわたって分布している。家の神棚（田の神：サの神）に苗を供える時期には、田植開始前（サオリ系）と田植終了後（サノボリ系）とがあり、全国的に分布している。宮城・福島両県ではサノボリ系が多いが、宮城県北ではサオリ系も広くみられる。

神社での豊穣を祈願する祈年祭や新穀を感謝する新嘗祭は、戦前には国家的行事であり、田植後の豊穣を祈願するお籠り（村祈禱など）も全国の各地で行なわれているものである。

虫送りは全国的な行事として有名であり、虫害を防ぐために、虫の霊に訴えて虫にその村から立ち退いてもらうために村境まで送る呪術的行事であるが宮城・福島両県でみられるように、水田の畦畔に串ダングなどをさし立てて祈禱するところも多い。

田植えは田の神の降臨を仰ぐ行事であるとして、初田植、中帳場、早苗振りなど、田植えの折目毎

にお祝いと慰労をする風習は全国の各地でみられる。

田植終了後の農閑休日（骨休み、手やすめなど）およびその後の農休日は、過酷な労働を癒すためのものであり、全国に共通するものであることは言うまでもない。

4. 摘 要

宮城・福島両県の昭和30年当時の慣行田植法に関連する諸行事について、1976年から1977年にかけて調査した。その結果の概要は、つぎの通りである。

1) 豊穡祈願

戦前は部落民や部落の代表者などが神社に集まり豊穡を祈願する祭典（祈年祭や村祈禱など）が行なわれたが、昭和30年頃にはほとんど姿を消している。しかし、各戸では、家の神棚に田の神を祀ったり、苗代や水田の水口などに田の神を祀ったりし、それらに御神酒や赤飯、餅などを供え（家の神棚には田植開始前または田植終了後に早苗も供える）たりして豊穡を祈願する行事が行なわれている。

2) 防病虫害祈願

田植えが終ると虫害が心配され、虫害のないように各地で虫送りが行なわれるが、その方法は地方によって異なる。即ち、ダンゴ餅や赤飯などをツトに入れたものを稲虫と称して竹枝の先に結んで村境の道端に立てて送るところや、ダンゴ餅やツト状のワラダンゴを竹串にさして水田の畦畔に立てて祈るところもあり、また、稲につく害虫をとって紙袋などに包んで竹枝の先に吊して川に流すところもある。

3) 田植期間中の祝い行事

田植えは田の神の降臨を仰ぐ行事であるとして、田植えの折り目毎にお祝いをする行事がある。田植初日の初田植、田植中間の中帳場、田植終りの馬鍬洗い、早苗振り、大早苗振りなどがそれぞれあり、両県で広く行なわれている。

田植初日には赤飯を炊き、田植終了日には餅をついて苗や御神酒と一緒に家の神棚（田の神など）に供えと共に、隣近所や親類などに赤飯や餅を配って祝うのが通例である。

馬鍬洗いは自家の田植えが終了したとき、早苗振りは部落または共同体の田植えが終了したとき、大早苗振りは地域社会全体の田植えが終了したときの祝い行事である。

4) 田植終了後の農閑休日など

田植終了後の農閑日を見計らい、1～3日位を骨休み、手やすめなどといって休養し、その後は三日押し、四日押し、四日詰め、^い・^六、^こ・^五・^十などと称し、4日ないし5日おきごとに午後の半日を農休日にしていくところが多い。

5. 引用文献・参考文献

- 1) 杜 宏史（昭和47年）米と日本文化—古代の風土・民俗をさぐる—・94～121・評言社の風土・民俗をさぐる—・94～121・評言社
- 2) 福島県教育委員会編（昭和39年）福島県の民俗（民俗資料緊急調査報告書）・福島県教育委員会
- 3) 岩崎敏夫（昭和48年）7、日本の民俗、福島・59～64、132～134・第一法規出版K.K.
- 4) 岩崎敏夫編（昭和51年）東北民俗資料集（三）・183～205・萬葉堂書店
- 5) 伊藤幹治（1974年）稲作儀礼の研究—琉同祖論の再検討—・而立書房
- 6) 宮城県教育委員会編（昭和41年）宮城の民俗（民俗資料緊急調査報告書）・宮城県教育委員会
- 7) 中西利徳（昭和8年）祝詞作文講話・66～67・祝詞作文講話刊行会
- 8) 佐藤徳雄・酒井 博・渡辺 正・東海林伸之助（1976年）宮城・福島両県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究・農作業研究・第28号・58～65
- 9) 竹内利美（昭和49年）4、日本の民俗、宮城・44～58、199～223・第一法規出版K.K.
- 10) 東北民俗の会編（昭和46年）陸前の中行事・15～231・萬葉堂書店
- 11) 柳田国男（昭和38年）定本柳田国男集、第13巻（年中行事覚書）・1～177・筑摩書房